

あなたはどちらの国に生きるのか？

「ゴルゴダ（ドクロ）での出来事 グレゴレート」

詩篇 22 マルコ 15：22～39 ルカ 23：32～48

【はじめ】

詩篇 22 篇 21 節までは、「神さまはここにおられるのどうしてわたしを助けてくださらないのですか。」というダビデの苦しみが歌われています。ところが、22 節からは突然、神への礼拝に変わるのです。いったい、21 節と 22 節の間に何が起こったのでしょうか。それは、マルコ 15：22～39、ルカ 23：32～48 に書かれています。

私たちは嘘をついたりごまかしたりしますが、これが罪なのではなく、罪から出た実なのです。では一番の罪とは何でしょうか？自分の罪をわかっていないことです。私たちが嘘をついてしまうことを悲しむ神さまがおられることをわかっていないのが罪なのです。たとえば、親子のことを考えてみましょう。幼い子が、悪いことをしてバレないように嘘をつきます。親は子が何をしたのかわかっていても、子はそうとは知らず必死に嘘をつきます。親は当然、子を叱ります。そのときの親は、その行為に罰を与えたいのでしょうか？「あなたは、悪い子だ。」と言いたいのでしょうか？そうではありませんね。悪いことをしてしまったとき、どう行動すればよいのか、素直に「ごめんなさい」すればよいということをお教えるのです。神様と私たちの関係も同じです。罪に対して、神さまと私たちとは意識が違います。だから私たちは、隠したり、とりつくろったりするのです。そのような人生はもうやめなければいけません。

【ルカ 23：39～43】

ルカ 23：39～43 をみてみましょう。ゴルゴダの丘で、イエスキリストと二人の犯罪人が十字架にかかっている場面です。私たちに想像もできないけれど、十字架刑とは息もできないくらいの痛みと苦しみが伴う拷問です。そのような中、犯罪人のうちの一人は、イエスキリストにむかって「本当の神なら、自分と私たちをこの苦しい現状から今すぐ救い出してくれ。」と言います。それに対し、もう一方の犯罪人は、「おまえは神をも恐れぬのか。われわれは自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだが、このかたは何も悪いことはしていない。イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、わたしを思い出してください。」とたしなめ、自分の罪を心から悔い改めるのです。このあとイエスキリストは悔い改めた犯罪人に「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」と言われます。例えば、もし、何人も人殺しをしたような大犯罪者が悔い改め、「これからあなたの家に行ってもいいですか？」と言われたとして、私たちは喜んでその人を我が家に迎え入れることができるでしょうか？でも神さまは違うのです。悔い改めた犯罪人に「一緒に天国にいる。」と言われたのです。ここでわかるように、罪を犯している人が罪人ではなく、罪を犯していることがわからない人が罪人なのです。確かに自分は罪を犯してきたがあの人は正しく、とか、「ごめんなさい」と言うけれど今こんな状況に自分がいるのはおかしいので、この現状をなんとかしてください、などと私たちは言っているのでしょうか？心の中で誰かを排除してはいませんか？私はもうしない、と決断しても隠れてやっちゃっていることはないですか？

【詩編 22：22】

ゴルゴダの丘の十字架の上で悔い改めた犯罪人。彼は、人々からは不要とされさげすまれた人でした。でも、自分の罪がわかり悔い改めたとき、歴史の中心に立ちました。けれど、もう一方の犯罪人はなにも変わりませんでした。歴史の中心にたった

彼はそのあと詩篇 22：22 へと続いていきます。

「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

あなたは私に答えてくださいます。

私は、御名を私の兄弟たちに語り告げ、会衆の中で、あなたを賛美しましょう。

詩篇 22 篇 21 節と 22 節の間に入るのは、この、十字架のできごとでした。

イエスキリストの十字架の前に、そこにいた人々のとった行動はどうだったでしょう。少し罪の意識を感じながらも、納得している大祭司カヤパ、大地震が起こりそれでも忠実に役割を果たす百人隊長、神殿が二つに割れて自分たちの居場所がなくなったパリサイ人たち、自分たちは悪くないと慌てふためくローマ兵。彼らはこのあとも変えることができず、なおこの頑なさを買っていきます。

【ある男の子の話】

ある男の子のお話です。その子の幼稚園でクリスマスの劇をすることになりました。男の子の役は「宿屋の主人」です。ヨセフとイエスを身ごもったマリアがやって来て、「宿に泊めてください。」と言いますが、あいにく部屋は空いていません。そこで「宿屋の主人」は、「泊まる部屋はないが家畜小屋なら泊まれます。」と、二人を案内します。と、そのとき、「宿屋の主人」役の男の子が、「やっぱりできない！イエスさまを家畜小屋に連れて！僕の部屋に寝て！」とセリフにはないことを言いました。先生たちは「劇だから大丈夫よ。」と男の子をなだめますが、男の子は「違う！劇じゃない。本当にあったことなんだ。僕はこんなことはしたくない！」といったそうです。このように本当にわかっている人は、たとえ劇でもできないのです。

まとめ

自分の罪がわかっていない人はいないのです。本当は心の中に「ごめんなさい」と言わなければいけないことがあるのはわかっているのです。でも、自分に嘘をついてしまっているのです。それを素直に神さまに言うことができないから、十字架で「自分と私たちを救え。」と言った彼ようになってしまうのです。そうではなく私たちは、「私がこの罰を受けるのは当たり前だ。それでも私のことを忘れてください、私のことを赦してください。」と言えたもう一人の彼のようにになりたいと思うのです。

目の前に問題があるのに見ないふりをしていませんか？本当は悲しいことがあるのに神さまに言わず、何か他のことをすることでごまかしていませんか？聖書は、自分に嘘をついているのが罪だと言っているのです。自分の胸に手を置き、本当の自分はどう思っているのかを見つけ、その心に従って決断をすべきではないでしょうか？自分を責めるのではない。誰かが自分をどう見ているのかなんて放っておけばよい。あなたがあなたをどう見ているかなのです。そして、それを神さまが見て、どう思われているかです。

あなたが今、「私の罪は明白です。しかし主よ、そんな私を思い出してください。」と言うことができれば、詩篇 22 篇 22 節からの奇跡があなたに起こると、聖書は約束しています。

(要約者：秋山 恭子)

(2023年4月23日)